

「私の山歩き」

北村 覚 《ヤマドラキチ》

(40年育種・諫早市在住)

山に登り始めて、やがて55年、今年古希を迎える。現役の頃の数年に一度といった山歩きが、還暦を迎える頃からは、女房と二人三脚での山行きになり、さらに妻亡き今は、年に200日以上、山を歩くという生活をしている。山は、「華甲の宴」(還暦祝)以降、私を励まし、癒し、私の人生を豊かにしてくれる大切な存在となっている。

山の楽しみは、一に山頂を極めること、二に花(草木を含む)を観賞すること、三に蝶(アサギマダラ)を観察することである。山行きの回数が増えるにつれ、県外へ、最近では中国、四国地方へ足を延ばすなど、行動範囲も広がってきている。以下、これまでの経験を踏まえ、山への思いや楽しみについて述べてみたい。



大船山・御池の紅葉



傾山・三ッ坊主コースのツララ

1 山頂を極める

・ 標高の低い山も高い山もそれぞれに良さがある。だから、計画段階から、どの山にしようか、予定通り登れるだろうか、何か新しい出会いはあるだろうか等、想いは膨らむ。いろんな情報を駆使しての計画づくりもまた、楽しいものである。その際、山仲間からの情報が役に立つ。長年、山歩きをしていると、情報交換できる山仲間も増え、今では、長崎県内はもとより、福岡、佐賀、熊本、宮崎にまで広がっている。いただいた情報は早めに活用し、最新の道路事情、山道の状態、開花の状況等新しい情報を添えてお返しすることとしている。

「さまようて くたびれ果てて 来てみれば 見渡す限り 春霞かな」
「柘植 (つげ) 青木 松縦 (もみ) 白木 白牡丹 自然造形 素晴らしきかな」

・ 山登りの基本は、自家用車利用の日帰り登山である。登り始めの時間は朝8時くらい、車への帰着時間は16時頃を目安にしている。だから、遠くの山に出かける場合、家を真夜中に出発するとか、帰宅が午前様になることもある。場合によっては、安全運転のため、車の中で一夜を明かすこともある。いずれにしても、どのようにも対応できるように、ガソリンは登り口で満タン状態にしている。



朝日に映える祖母山



初夏の雪渓・雲仙のヤマボウシ

・ 山歩きには必ず非常食を含めた食料を持参する。今どきはコンビニ等でおにぎり等、簡単に手に入るが、マイ弁当を作って持っていくことにしている。食べるという楽しみが持てるほか、すこしでも時間が短縮できる。グループ登山の場合でも、特別にいつもより多く持っていくことはない。誰かと菓子一つ、ミカン一個のやり取りがあっても、ザックの中味が増えたり減ったりする。ザックの中味は必要最小限にし、1グラムでも軽くする。また、飲み水は山中で入手できないことが多いので、冬500cc、夏は2000ccの水をザックに入れて持っていく。これまでの経験から自分の飲む量が分かっているので、余分の荷物を背負わなくて済む。

「とろとろと 傾山は 独り占め 小春日和に 日向ごっこす」

・ そのほか、携行品として、地図、コンパス、雨具、ヘッドランプ、杖は必ず準備する。冬山の場合は、これに防寒着、軽アイゼン、厚手の手袋を加える。私にとってこれらの装備は安全確保のため最低限必要なものである。

山頂を極めるために何より重要なのは、これらの装備を背負って山坂を上り

下りする体力をつけることである。疲れて途中でやめたいと思うことはない。これもここ数年、年間200日ちかく山を歩いているため少しずつ体力が積み上がっているからだと思う。

(参考) 最近の年間登山日数

平成19年	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年	平成24年
87日	213日	217日	248日	183日	242日

・九州の山でも、年に1～2件は山の遭難による死亡事故が起きている。その多くが滑落事故である。過去の事例を見ても、事故は初心者だけに起こるのではなく、経験者のちょっとした油断による事故も多い。これまで山歩きの中で、小さなトラブルには数多く遭遇してきた。雷や吹雪、予期せぬ路面の崩壊による山道や車道の不通、事前の調査不足によるコースの変更と、数え上げればきりが無い。しかし、このようなトラブルにより学ぶことは多い。そして、これが次回への備えを充実させることにもつながる。



深山の貴婦人・オオヤマレンゲ



経ヶ岳とシダレ桜

2 花を觀賞する

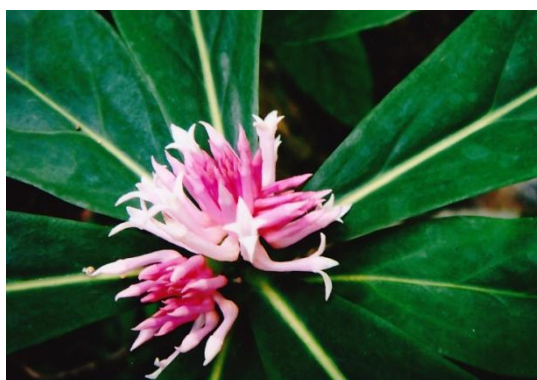
山に入ると、道中、四季折々の花が目を楽しませてくれる。新緑に映えて咲く花、紅葉の中で隠れるように咲く花、枯草の中あるいは雪の中でひっそり咲く花、どれをとっても自然の中で見る花々は図鑑で見るのとは違い、趣がある。

年に三つくらいは自分の知らない花に出会いたいと思って山を歩いてきたが、今では四百以上の花の色、形及び生息場所が頭に入っている、最近出会った花はヤッコソウ、錫杖草、オニノヤガラ、ヒナラン等々。道中、美しい花、可憐な花に出会うと疲れも吹き飛ぶ。それが初めて出会う花だったらなおさらだ。

まだ雪の残るころに咲き出すエイザンスミレ、フクジュソウ、春先からはエヒメアヤメ、イカリソウ、夏にはヒナラン、ツチビノキ、秋にはヤッコソウ、ホトトギス等、山の花は1年を通して楽しむことができる。山仲間には同じように花の観賞を趣味とする人が多い。教えたり教えられたりしながら山に咲く花に関する知見を増やしてきた。これからも仲間との交流を通じさらにその種類を増やしていきたい。

「花華に 付き添われての 遠山行 頭も頬も 酒酔いに似て」

「登りたい けど立ち止まり 岩見上げ 花華たちも そっと寄り添う」



世界でも珍しいツチビノキ



椎の林床のヤッコソウ

3 蝶を観察する

蝶を観察するのも私にとっては山歩きの楽しみの一つである。現在、注目しているのは「海を渡る蝶—アサギマダラ」だ。この蝶に初めて出会ったのは、昭和55年、五家原岳だった。羽の色合いといい、飛び方といい一目ぼれ。文献や山での観察によりアサギマダラの食草が判明（冬はキジョラン、夏はツクシガシワ等）し、産卵から羽化まで「おっかけ」をしている。この蝶は、群生する草のほんの一部の葉裏に産卵する。孵化後は卵の殻を食べ尽くした後、葉を丸く、点でかじり内側を食べる。その後脱皮を繰り返すが、蛹化の時は逆さに体を固定してペールを脱ぎ、黄緑色に変わる。蛹から出たらそのまま5時間以上殻にぶら下がり、体液を出して身軽になるやいなやあっという間に一直線に空に向かう。11月、北西の風が吹くころ何十頭という蝶が一斉に姿を消す。翌年の春に羽化する卵を別の食草に産み付けたのち、南の喜界島方面へ渡っていくと云われている。観察の積み重ねにより、少しずつ、アサギマダラの生態が分かってくると楽しみも増す。大分県姫島村にも出かけたが、1平方メートルに満たないところに50頭近くの蝶が乱舞する様は圧巻である。

蝶の観察は夏場が中心となるが、冬場でもアサギマダラの食草や幼虫の生育状況の観察ができ、1年を通して楽しんでいる。これからも生態の新たな発見

を期し「おっかけ」を続けていこうと思う。



アサギマダラとツワブキ



アサギマダラの食草、キジョラン

「うろ覚え 右往左往の ウツケ者 どうにか着いたよ 小雪小槍は」
「急いでも 一步ずつです 山登り 頂に立つ 満顔の笑み」

4 その他

通常、山行きは事前準備から始まり、アプローチ、山登りおよび山下り、帰宅という流れになるが、どの段階でも緊張感を持つことが求められる。また、体力、知力、判断力も試される。山歩きが老化防止の特効薬であることは間違いない。古希を迎えた今、これからも注意深い山歩きを心がけ、心身ともにさわやかな人生を送りたい。(終わり)



大崩山を登る



南国に咲くキバナノホトトギス